

1

煙は横に流れてゐる
屋根の上をゆつくりと這ふ
邪魔をするものはみない
猫がゐるのだがねそべつてゐるだけだ

しづかな一日もやがて夕暮になるのです
私は街の人ごみを歩くことが出来るのです
私を愛してくれる人を私はお前といふことにする
遠くの窓に西日が当つてゐるのが見える

人生では愛することだけがほんたうなのに
どこにゐるのだらうかお前という愛の相手は
煙はゆつくり横に流れてゐる

私の心はお前の方に近よる
私の心はお前の心によびかける
煙もお前をさがしてゐるのだらう

2

お前は どうして 私の胸の中に入ったのか
お前は さうなるのが きめられてみたかのやうに
私のくちびるの下にお前のくちびるを
どうしてあのやうにしづかに待つやうにしたのだらう

青い色の街の屋根とひらかれた二階の窓とが
青いガラス戸をとほして見えたが 西日があたつて
塔は黄色にかがやいてみたやうだ
私はうすもも色のお前のくちべにを見つづけた

お前はひざまづいてきまつた時間には私を思ひ
私はうなだれてきまつた時間にはお前によびかける
おそろしい愛の日がはじまるのだ

もし 私たちが鳩であつたなら 飛び立つて
空をぐるつと大きくひとめぐりしながら叫ぶだらう
ああ どうして私たちは抱きあつたのだらう くちづけしたのだらう

3

階段の所に立ち止つてしばらく立つてゐた
お前の髪の毛を近く感じた次の瞬間に
私たちは離れて二人は顔を見ることをおそれた
屋根の上の日の光と遠くのゆれてゐる緑の梢と

別々の所に飛んで行きさうな気もするのだが……
やはらかい細いしなやかなお前の指とうすいくちびると……
いまはもう離れて階段の所に立ち止つて……
屋根の上の日の光と遠くのゆれてゐる緑の梢と

もう一度近よらう お前をもう一度私の側で
ためいきをつかせよう ふれて目を見つめよう
階段を一段づつ下りて行かう

時間といふものは断裁機のやうなものだ
風景はお前と私とをどうしようとするのだらう
風が吹いてゆれてゐるらしいすべてゆれてゐるらしい

4

後悔がいつかは心を占めるのだらう
ゆつくりとひろがつてゆく夏のやうに
お前はあの時私の目を見つめた
私は哀れな人間でしかなかつた

私の手はお前からまみりながらみにくかつた
お前のほほに私は私を寄せてゆきながら
言葉をわすれてふるへてゐるだけだつた
どこにどんなおとし穴があるかわからないと思ひながら

からだの大ききのちがふことがお前を愛らしくさせてゐた
もも色の小鳥のやうな手をいつまでもわすれないだらう
私はお前の声をいつまでもわすれないだらう

くちづけした時にはお前の歯が
宝石にあてた時のやうに感じた いつかは後悔が
黒い雲のやうにお前の心を占めるのだらう

5

手を組んで私たちはかけ抜ければよいのですか
さまざまのことは考へないで先の方へ先の方へと
頭の上にかぶさる森の葉の黒い影を
よけながら私たちだけがかけ抜ければよいのですか

愛してゐる 愛してゐますとくちびるの中でそつと
くちびるをふるはせて言ひながらほとんど目をつぶつて
もつれるやうにならないやうに注意しながら
足音あらくかけ抜けてしまはうとするのですか

私たちの中でもえるやうに影の中でもゆれてゐるものでせうか
胸の火はあの足音は消えないものでありませうか
さうした愛しあふ二人になりきつて下手から上手へと私たちは

かけ抜けるのですね 光は私たちを輪の中につつんで
ずうつとついて来てくれるのですね つまづく場所では
一瞬は光の輪もとどまつていたはるやうに照らしてくれるのですね

6

街燈の青い三角の光が絵のやうだ
暗い壁のすみつこの所では
しづかな夜が二つの心をやさしくなせてゐた
壁にもたれてお前はうつむいてばかりゐた

けだもののやうにあらあらしく私はお前に
ふるまつた 私は言つた（お前を愛してゐる
お前を愛してゐるのだから）
私の声はお前の耳に流れて入つた

誰かが次第に街燈を持ちあげた
光の円周が地の上を動いて
私たちは青い光の中に立つた

手をにぎりしめて二人が立つてゐるのは
赤い壁の前であつた 光の方に顔を向け
きびしい目をしてゐるのはその壁の前であつた

7

すぎ去った風景はとりもどすことは出来ない
お前はふりむいてはいけない
お前の目の上をすぎ去るものを私の見るにまかせて
二人の人生が崩れるのを待つばかりだ

二人の人生がもし崩れないでいつまでもつづくのならば
風は たえず お前の髪をなでてみるだらう
青い空の下で並木と建物の窓とが
私たちがむかへさうして私たちを見送つてあるのであらう

お前のほほゑみのうしろにかくされた深いもの
つかれたやりきれないさびしさとそのほかのものがすぎ去り
何も二人のうしろには残らないのではないか

遠い空の方から色のついたテープがからまりあひながら
長く落ちてくる 確実なものはないのだから
その中をすぎても 二人は抱きあふだけであらう

8

小さい二つの心などは消されてしまふ
強い日の光は照りかへして白い矢のやうだ
どこかへ私たちは逃げなければならない
しづかなつめたい風が吹き音楽が聞える場所へ

ある時は虹色の雲がとどまり
夕暮が幕のやうに落ちてくるそのあとには
星が私たちを見つめるやうな
何事もおこらない場所へ逃げなければならない

私たちはすでに 方々から投げかけられてゐる
一歩 歩めば足の下ははげしい音をたて
階段からもたくさんの石がころがり落ちる

もんどり打つて落ちかかり来るはげしいもの
お前のやさしい手の中に私の手は支へられ
進めば日の光は白くするどい矢のやうだ

9

赤くもえ立つ雲に向つて
たじろがないのは誰だらう
お前だらうか それとも 私だらうか
おそろしい気持を持つてゐるのは

両側のコンクリートの塀はせばまる
道だけが ぐんぐん高くなる
あるひは私たちは前に行くだけかもしれない
一人にはもう道がないかもしれない

二人が一人になればいい
しかしお前には私の外に男がゐたらう
私にはお前の外に女がゐた

時間がすぎれば夜になるだらう
つめたい青い星のきらめく下で
なほ ほそい道はつづいてゐるだらうか

10

誰が知つてゐると言へるだらう
お前の愛した人の数を
誰が知つてゐると言へるだらう
私の愛した人の数を

木の葉の影のあひだから青い空が見え
一つ一つが人の顔のやうだ
お前にはそれが私の愛した人に見える
私にはそれがお前の愛した人に見える

しかし このふるへるからだをどうしよう
私の手の光る刃を
お前の手にもにぎらせよう
木の葉の影のあひだから青い空が見え
一つ一つが人の顔のやうだ
私たちをひきとどめようとして手をのばしてゐる

11

最後の時がやってくるのは
お前の方が早いだろうか
私の方が早いだろうか
だるくまぶたを閉ざす時は

空に太陽が照りかがやき
すぎて行くのはあへぐ声ばかり
それがお前のを私が聞き
私のあへぐのをお前が聞いて

ぐるぐる廻る思ひ出の火
あれはガスだつた 薪のやうに見せかけて
めらめらもえあがつてからみついた火

だるくなつたまぶたを閉ざさないやうにして
お前の指をくちびるの中に入れ
私はいつまでもしやぶりつづける

12

自然の中で光をあびて
二人の顔は白く光る
つつましく向きあひながら
二人の顔は白く光る

月目がすぎて光も消えて
お前の髪はばさりと抜ける
あでやかにほほゑみながら
お前のほほはくさりはじめ

行きませうね すすきの葉が
油ぎつてゆれてゐる道のあひだを
どこまでもすすきの葉にかくれるまで

生きてゐたからだのすべてが
風に吹かれて消えて行くやうに
どこまでもすすきの葉にかくれるまで

13

ガラス戸の外を音もなくすぎる足を
私はあたたかい室から見つめてゐる
一人のおそい歩みがすぎる
二人のそろって大股の歩みがすぎる

ある人はからだをななめにして
男は女の顔をのぞきこむやうにして
私は一人であるのかうしてたくさんの
人の心が私の中を通りすぎて行く

木枯に吹きちらされた木の葉が
戸の中へ入らうとしてふるへてゐる
茶色の葉脈がゆれてゐる 私にそれまでが

街の中で迷つた人の姿のやうに感じられる
ふと あれが私ではないかとさへ思つた
乱れてゆれてゐる ガラス戸にすひついて